

第5学年 社会科 授業構想シート

授業者 中山 和幸

本実践の主張点	目的や活動内容を明確にしたプロジェクト型の学習を行うことで、子どもは、活動が目的にあっていくかどうかを自ら省察し、探究の質が高まるだろう。
---------	---

1. 単元名 わたしたちのくらしとこれからの食料生産

2. 5年B組の子ども

5年B組の子どもは「自分たちが食べているご飯は、いつ、どこで、どのようにつくられたものか」を問われると大部分の子どもが田植えの時期や稲刈りの時期、米作りの盛んな地域については何となく知っているものの、どのようにしてつくられたものなのか（生産工程や農家の方の工夫や努力）についてはほとんど知らなかった。また、食料生産にかかわる諸問題（農業人口の減少、耕作放棄地、食料自給率の低下）などの問題については、生産者が抱える問題であり、消費者の自分たちにもかかわりのある問題であると捉えられている子どもは少ない。

3. 何ができるようになるか

探究力	・社会的事象の見方・考え方を働かせながら、目の前の未知の問題に対して、探究のプロセスをとおして、解決に取り組む資質・能力
省察性	・社会的事象の見方・考え方を働かせながら、自らの学びにおいて学びの方法や道筋を調整・改善したり、学びを意味づけたり、学んだことを自己の生活や行動につなげたりする自己効力感に支えられた資質・能力

4. 何を学ぶのか

① 単元の目標

各種の統計資料を活用しながら、日本の食料生産をめぐって、生産者の減少および高齢化や耕地放棄の問題などの問題があることを知り、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、これからの食料生産のあり方について生産者、消費者両方の立場から多角的に構想することができる。

② 教材の価値

日本の食料自給率（カロリーベース）は、37%（H30）であり、主要先進国と比べても低い。また、和歌山県の食料自給率は29%（H30）とさらに低く、この事象は、子どもたちのもつ「和歌山は、農業が盛んな地域である」というイメージとのギャップが大きい。このギャップは、子どもの興味・関心を掻き立て、主体的に学習に取り組む姿につながるだろう。本教材と出合い、食料自給率の問題の解決には、生産者（大人）だけではなく、自分たちを含む消費者もかわりがあり、消費者として、自分にできることをする必要があるという子どもの見方・考え方が育まれることを期待する。

③学年間・教科間のつながり

CHANGE「お米を育てよう」の学習で得た「米づくにおける生産者の工夫や努力」についての知識が本単元の問題解決に知識を「補完」するかたちで活用される。また、本単元の学び（内容知・方法知）が特別活動「ユメの食料自給率 100%メニューをつくろう」の探究のプロセスにおいても活用され、各々のプロセスが充実する。

5. どのように学ぶのか

①学習内容を理解し、資質・能力を育成するための学習過程

単元計画（全7時間） 本時 5/7 一次 日本の食料自給率について知ろう。 - 日本の食料自給率を知ることから思いや願い、疑問をもつ。① - 日本の食料自給率低下の原因について調査する。② 二次 日本の食料自給率低下の問題解決策を考えよう。 - 和歌山県の食料自給率の問題や原因について知り、学習問題を設定する。③ - 和歌山県の取り組みをもとに、和歌山県の食料自給率の問題の解決策を考える。 ④⑤(本時)⑥ 三次 自分たちの学びを振り返ろう。 - 自分たちの学びの意義や学び方についてふり返り、学びを実感するとともに、次の学習の見通しをもつ。⑦	単元における授業づくりの「しかけ」 探究力 主：主体 協：協働 活：活用 省察性 気：気付く 決：決める 動：動く 探究力を育む 主 子どもの未知と既知のずれを生かした資料提示や発問を工夫し、子どもの興味・関心を掻き立てることができるようにする。 協 プロジェクト型の学習にし、子どもが協働して学ぶことができるようにする。 活 パフォーマンス課題の性質を含んだもの学習問題を設定し、既習を活用した問題解決を進めることができるようにする。 省察性を育む 気 子どもの未知と既知のずれや目的と活動のずれに気づかせる資料提示や発問を工夫し、子どもが自らの考えや学習を見直すことができるようにする。 動 振り返りの場の設定や教師による価値づけを行い、子どもが学びの意義を実感できるようにする。
---	--

6. 何が身に付いたか

	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
評価基準	各種統計資料を活用し、食料自給率の問題の解決には、生産者だけではなく、消費者の協力も必要であることを理解する。	地理的・歴史的・関係的な視点で、食料自給率の問題の解決策について話し合い、自分の考えを表現することができる。	食料自給率の問題について粘り強く調査し、考えるとともに、学習を振り返り、考えを広げたり、深めたりしようとしている。

社会科学習指導本時案＜修正版＞

授業者 中山 和幸

日時：令和2年7月1日（水）第6校時（14：30～15：15）

対象：第5学年B組 29人

本時の主張点	問題解決の遂行段階において、子どもが働かせていない見方・考え方を含んだ資料を提示することで、子どもが省察し、より多角的な見方・考え方を働かせながら、知識を活用した問題解決を進めることができるだろう。
--------	---

1. 本時の構想と学習問題について

前時までに、和歌山県の食料自給率にかかわる問題やその原因について知り、個々に解決策を探ってきた子どもたちが、仲間と協働し、解決策を吟味する時間が本時である。本時は、学習問題「どうすれば、和歌山県の食料自給率をあげることができるだろうか。」の解決に向けて、「食料自給率低下の原因」や「県の取り組み」など、既習の知識を活用しながら、個々の見方・考え方を働かせた意見を聞き合う活動が中心となる。その過程において、子ども自らが自己の考えを省察し、消費者としての自分たちにもできることがあるといった新たな見方・考え方が生まれ、より多角的な視点に立った知識の活用・発揮が促されることで、子どもの探究の質が高まるようにしたい。

2. 本時における探究の質を高める場面と授業づくりの「しかけ」について

本時における探究の質を高める場面は、和歌山県の食料自給率向上に向けて、個々の意見を聞き合う場面である。県の課題として、「農業従事者が減少していること」「耕地面積が減少していること」が挙げられることから、生産にかかわる解決策が出されることが予想される。また、外国産の食べ物の安さから外国産を買う人が増えていると考える子どもが多くいることから、外国産の値段を上げたり、日本産の値段を下げたりするといった解決策が出されることがも予想される。その場面において、「米の生産調整の様子を示すグラフ」と「安い外国産、高い日本産（写真）」の2つを提示することで、これまでの自分の考えや行動を省察させ、生産は消費と結びついていることや消費者として自分自身の食への関わり方を見直す必要があることに気付かせたい。（気づく場面）その後、生産と消費は結びついているという新たな見方・考え方を働かせながら、消費者として自分たちにできることを考え始める姿を期待する。（決める、動く場面）

3. 本時における評価活動について

問題解決の事後においては、子ども自身の振り返り活動及び教師による評価を行いたい。特に、教師による評価では、板書を用いて、子どもの学びの質が変わった点（生産と消費が結びつくことに気づき、消費者として自分たちにできることを考え始めた場面）を価値づけ、「新たな見方・考え方」が生まれ、考えが広がったこと、更新されたことを価値づけることができるようにする。そうすることで、子どもが、多角的な視点に立って問題解決を進め、考えが更新することのよさを実感できようようにしたい。

4. 本時の目標

生産者、消費者両方の立場に立って、個々の見方やこれまでの学びを活用・発揮したりしながら、和歌山県の食料自給率を向上させる方法を多角的に考えることができる。(思・判・表)

5. 本時において働かせたい見方・考え方

☐くらべる ☒つなげる ☐まとめる ☐わかる ☐予想する ☒見方を変える

6. 本時の展開

学習活動と予想される子どもの反応	留意点・評価
1. 本時の学びを見通す。 2. 本時の学習問題について確認し、各々の考えを聞き合い、吟味する。 学習問題 どうすれば、和歌山県の食料自給率をあげることができるだろうか。 予想される子どもの反応 生産にかかわって ・農地を増やす取り組みをすすめたい。 ・農家を増やす取り組みをすすめたい。 消費にかかわって ・地産地消を進めたい。 ・宣伝で日本産のよさを伝えたい。 + 消費者として自分たちができること ・日本の食べ物を買うようにしたり、日本の食べ物を食べたりして、日本の農家を応援したい。 3. 学びを振り返り、次時の活動を見通す。 (期待する姿) ○生産と消費は結びついているものだから、わたしたちにできることをして、生産者を応援していきたい。 ○自分たちにできることを次の時間はもっと考えていきたい。	・はじめに本時のゴールを確認し、見通しをもたせる。 ・ペア対話を行い、各々の考えをアクティブに表出できるようにする。 ・表出された考えのつながりや構造が子どもにとってわかりやすいように、構造的に板書することで、子どもの思考の整理を助ける。 授業づくりの「しかけ」 ・「米の生産調整の様子を示すグラフ」と「安い外国産、高い日本産（写真）」を提示する。 ・生産と消費が結びついていることに気付けない場合は、「食べる人が減っても、生産は増えるのかな。」などの発問をしたりする。 ・「安い外国産、高い日本産」の写真を提示することで、消費者としての自分の食への関わりを振り返らせるきっかけにできるようにする。 知 生産者、消費者両方の立場に立って、個々の見方・考え方やこれまでの学びを活用・発揮したりしながら、県の食料自給率を向上させる方法を多角的に考えることができる。 教師による評価 ・本時に置いて、見方・考え方に広がりが見られ、考えが更新された場面を板書を用いて解説し、子どもの学び方を価値づけることができるようにする。